

# 〈新しさ〉のために循環する表現

## —女性向けファッション雑誌『InRed』を材料に—

保田祥（東京大学） 岡本雅史（清泉女子大学） 荒牧英治（東京大学）

### 1. はじめに

本稿は、女性向けファッション雑誌の表現分類を行い、表現の変化が繰り返され、更には循環しているという現象を示す。

ファッション雑誌は、流行に対応した迅速な購買促進のため、常に新しい情報を提供する。そのため、その紙面からはアイテムや情報などの様々な新しさを表現することを目的とした言語現象が観察される。

篠崎（1997）は、流行語の発生条件についてまず「新奇さ」を挙げ、「われわれは、マンネリズムを嫌い、既存のものに飽きると目新しいものを求めていく。ことばの面においては、カタカナ語の使用によってその欲求を満たすということも一つの手段である」とする。よって、ファッション雑誌に、カタカナ語（「フレッシュマスキュリン」「ファッションスタ」など）をはじめ、流行している語（「鉄板」「仕分け」など）や専門用語（「スラウチ」「パテント」など）の積極的な取り込みが見られるのは当然といえよう。しかし、流行語や専門用語、あるいはカタカナ語だけが、ファッション誌における〈新しさ〉を表す表現とは言い切れない。そこで、本稿は女性向けファッション雑誌『InRed』を調査対象とし、〈新しさ〉を有する表現が、どのようなもので、どのように用いられているのかを調査した。また、〈新しさ〉を有する表現が変化し、循環していることを確かめた。

### 2. 本稿の調査

本研究の調査対象は『InRed』（宝島社）とした。女性向けファッション雑誌は、対象とする年代とライフスタイル毎に分化されているが、販売数が同分野で常に首位近く<sup>1</sup>、30代女性向け且つ多数派（カジュアル）向けであることが明らかな雑誌『InRed』を選択した。2008年11月から、3か月毎に2011年8月までの12冊について、広告と連載小説等の編集部外記事を除く大小見出しを用例として分類を行った。

〈新しさ〉を有する表現とは、一般的にあまり使用さ

れていない表現であると考えられる。〈新しさ〉を有する表現であるかどうかを確かめるために、調査対象とした雑誌と同時期のTwitterデータにおける当該表現の出現頻度も併せて調査した。Twitterに用例がないかあるいは稀（出現頻度20回以下）であることにより、表現が〈新しさ〉を有しているものと確認した。さらに、表現の初出時期が調査対象年間の『InRed』誌上で確認できなかった場合には、BCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese））の雑誌コーパス（2001年～2005年）を利用し、女性向けファッション雑誌各種における当該用例の初出時期として補填したほか、調査対象年間の3年～10年前に既に用いられていた表現であるのかという確認を行った。

### 3. InRedに見られる〈新しさ〉のための表現

『InRed』において、〈新しさ〉を有する表現が用いられるのは、次の二つの場合である。まずは、新しい対象物に対して、〈新しい〉名前をつけるケースがある。次に、既存の対象物に対して、それを新しいものであるかのように見せるために〈新しさ〉を有する表現が使われることがある。本稿では後者に注目する。

後者の場合にはさらに三つの用法があり、(3.1) 一部に使い古された語（〈新しさ〉が失われた語）があった場合、それを言い換えることによって〈新しさ〉を付与する方法と、(3.2) 既存の語の〈新しい〉組み合わせを作る方法、および(3.3) 他分野や古い表現の借用／再生や異表記の導入によって〈新しさ〉を見せる方法がある。

#### 3.1 語の言い換えによる〈新しさ〉

使い古された語を言い換えることによって〈新しさ〉を付与する場合がある。例えば、外来語「リッチ（なブルウス）」を取り入れた後、それを、更に「ラグジュアリー～」「リュクス～」などに言い換えた例が見られる。この変化は各単語の『InRed』誌上での出現頻度の変化に現れている<sup>2</sup>。また、このような言い換えは名詞句の修飾部

<sup>1</sup> 書店（amazonなど各種）の販売数ランキングで、確認できる限り、常に女性ファッション誌部門の10位以内に位置していた。

<sup>2</sup> BCCWJ（2001年～2005年）では、「リッチな」の用例が56、「ラグジュアリーな」が17、「リュクスな」が5である。『InRed』では、「リ

において見られることが多い。これは、修飾語として用いることで、完全には意味が伝わらないとしても、既存の対象物の種類が拡大されたという印象とともに、語感としての<新しさ>がある感じや、構成音の音象徴的印象などが伝わるのが期待されるからである。たとえば、外来語などの初出は「リュクスな」(2004年)「マチュアな」(2009年)「エッジイな」(2009年)のように、形容詞形が用いられやすく、対象物の修飾語となりやすいことが観察されている。一方、名詞句の主要部が<新しさ>を有する場合は、その名詞句全体の意味を汲み取れない恐れがあり、その用法は少ない。

ただし、言い換えが頻繁に行われることで、どのように言い換えられたのかかわからない場合もある。たとえば、意味取得が困難な用例(「シアーなアーバンバカンススタイル」「アグレッシブなトレンチ」など)が見られ、既存の表現のなんらかの言い換えだと推測されるが、どのような語から言い換えられたのかは不明である。このような外来語の特殊な意味用法や原語の意味を反映しない語の使用(勝田(2011))は、少なくとも語感としての<新しさ>を伝えていていると考えられる。

### 3.2 語の組み換えによる<新しさ>

次に、対象物の<新しさ>を表すために、「ボーイフレンドデニム(2009年(2006~7年初出が<sup>3</sup>))や「マカロンカラー」(2010年初出)のような新しい「AB」型の複合語が出現することがある<sup>4</sup>。主に既存の対象物の上位カテゴリ(=複合語の主要部に相当)に追加(もしくは再生)されたメンバーを表すために用いられていると考えられる。しかし、既存の対象物を言い換えているにすぎない場合が多い。対象物の<新しさ>を表すというよりも、命名に近い形で、新たに登場した対象物らしく名づけているのだと言える。このような場合、複合語を構成するA・Bは、ともにとりたてて<新しさ>を持っている語ではないが、複合語となることで<新しさ>が生じている例である。

なお、石井(2007)は、臨時の複合語(「AB」)と連語(「AのB」「AをBする」)の使用頻度を比較し、連語が先に現れ使用頻度が減少することと、臨時の複合語がその後一貫して使われることを示している。「AのB」を経ず<sup>5</sup>、複合語「AB」が用いられるのは、既に流行している

ッチはまれに用いられる程度で、2009年頃まで「ラグジュアリー」が増加傾向にあるが、「リュクス」が用いられはじめることで減少し、2010年以降「リュクス」が増加している。

<sup>3</sup> 「ボーイフレンド+普通名詞」はBCCWJ(2005年まで)に用例が見つからないが、2007年からUNIQLO社が「ボーイフレンドデニム」の販売を開始している。

<sup>4</sup> 近年、全く新しい命名のなされた対象物は見当たらない。

<sup>5</sup> たとえば「ボーイフレンドデニム」は「ボーイフレンドのデニム」ではない。「ボーイフレンドのデニムのようなデニム」であろう。「マカロンカラー」であれば、「マカロンのカラーのようなカラー」ということ

かのように当然のごとく用いることで、あたかも流行の先端であることを表現しているものとも考えられる。<新しさ>のある用法により、現実とテキストの差異を利用した戦略とも言えよう。

### 3.3 借用/再生/異表記による<新しさ>

他分野や古い表現の借用/再生や異表記の導入によって<新しさ>を見せる方法がある。

**借用:** 他分野で概ね用いられている用語を借用する場合がある。「甘辛ミックスで奏でる」(2008年(2005年までに「奏でる」のファッション誌での用例はない))「隠し味を注入」(2011年(2005年までに「隠し味」「注入」ともにファッション誌での用例はない))などの例がある。

**再生:** 古い表現や、漢語などを用いた<新しさ>を感じる複合語がある。たとえば、「イットルック」「イットパレット」(2009年(1960年代の流行語「イット」))や、「リアルクローズ」(2004年(1970年代の用語))などの古い表現や、「裸色」「熱帯色」(2009年)などの漢語がある。これらの表現は、「イットな」(2011年)「リアルな」(2004年)のように一部の要素が再生され、「AなB」の形をとった<新しさ>を有した形容表現(4-①)として用いられ、循環に組み込まれる例が観察されている。

**異表記:** 表記の変化により、通常の場合との意味の違いを表そうとする場合がある。「LOVE バッグ」(2009年)・「スカーフで華やぎを IN」(2011)のようなアルファベット混じり表記や、「キレイ色」(2001年~)・「オンナっぽい」(2011年)・「コーデのハズシ」(2008年)のようなカタカナ表記にする例である。これらもまた、循環に組み込まれており、たとえば、「キレイ」の用例を追うことで、単独で体言(4-④)として用いられる例として、「キレイはカラーゲンにアリ」(2010年(2005年までに「キレイ」が体言となる用例はなし))などが確認できている。

## 4. <新しさ>のために循環する表現

3節では複合語の構成要素を言い換えや組み換えを行う現象を見たが、同一の語を用いる場合でも、接続の仕

になる。「大人女子(「大人の(な)女子」か)」(2008年)、「キレイ色(「キレイな色」か)」(2001年初出・2003年頃より複数出現)、「深みブルー(「深みのあるブルー」か)」(2009年)や「偏愛アイテム(「偏愛するアイテム」か)」(2009年)なども見られる。

なお、「デコラカーデ(「デコラティブなカーディガン」か)」(2008年)「ロマかわ(「ロマンティックで可愛い」か)」(2010年)のような略語や短縮に類した表現とも考えられる。「ゆるふわ」(2005年まで用例なし)のような「ゆる」「ふわ」の複合による略語は、それぞれの成分が、「ゆるロンT」「モテゆる」「ふわ揺れ」「透けふわ」などと複合語として用いられるが、略語のまま単独で「ふわな」「ゆるな」のように用いられる例は、現在のところ見つからない。モーラ数については詳述しないが、2モーラの語は単独で用いられにくい可能性がある。しかし、「ミニな」(2010年)の出現が見られていることから、循環に組み入れられる可能性はあろう。

方を変化させることにより、用法の<新しさ>を生み出すことがある。たとえば、「リクス」という語は「リクスな」～「リクス感」～「大人リクス」のように形を変えて用いられている。このようなパターンは有限であり、これを使い尽くすと、もとのパターンに戻る（すなわち、《循環》する）という現象が見られる。これは、ある表現型が使い古されると、使用される例の少ない用法へ移行<sup>6</sup>するからだと考えられる。

調査の結果、『InRed』では、同じ語を用いた表現が、主に、①修飾語 ②複合語（前項） ③複合語（主要部） ④体言（単独用法）の四種類のフェイズを循環している傾向が見られた。

たとえば、2003年（「＝贅沢」との説明つき）に初出の見られる「リクス（A）」では、2004年には「リクスな（AなB）」の形で用いられる例<sup>7</sup>が確認されており、修飾語（①）の用例として出現する。また、複合語（②）化した「リクス感（AB）」の用例も現れる。2010年になると、被修飾語化し、複合語主要部（③）となる「大人リクス（BA）」の用例が見つかる。このほか、2001年から2005年に用例の見つからない「マスキュリン」は、2008年に複合語前項（②）の例として「マスキュリンジャケット（AB）」で見つかり、2009年には複合語主要部となり被修飾語化（③）した「ふんわりマスキュリン（BA）」「フレッシュマスキュリン（BA）」などの用例も現れる。さらに、単独で体言（④）となっている「マスキュリンとフェミニンが共存する」のような用例も見つかる。このように、『InRed』に現れる表現のフェイズを時系列で追うことにより、①から④が循環し、その時点で<新しさ>を有する表現へと変化する傾向がわかった。以下に大まかな循環のプロセスを示す。

#### 4.1 複合語化（①修飾語→②複合語（前項））

前述したように、<新しさ>を有する語「A」は修飾語として導入されることが多いが、修飾語としての用例が増加し、「AなB」の形が定着段階に入る（＝<新しさ>が失われてくると、「AB」という複合語が用いられる割合が増加してくる。このとき「A」は複合語の前項として用いられ、既存の対象「B」が主要部である。複合語になると、対象「B」は、具体物（ジャケットやコートなどのアイテムが中心）から、他の修飾語にもなる。「ガーリー」を例にすれば、「ガーリーチェック」「ガーリーカジュアル」（2009年）、「スウィート」では、「スウィートボヘミアン」（2008年）「スウィートモード」（2011年）などの用例がこのフェイズにあたると思われる。

なお、3.2で述べたように、「AなB」や「AのB」の形

を取らず、「臨時的」な複合語「AB」として、唐突感を伴った初出の場合もある。「ヌーディカラー」（2002年）や「リゾートフルワンプ」（2009年）などの例では、前項「A」の<新しさ>が強い場合には「AなB」と分解され、「ヌーディなピンク」（2005年）のような例が追って見つかることもある。但し、「A」の定着が進むにつれ、「ヌーディカラー」（2010年）のように再び複合化した例が増加することが観察されている。

#### 4.2 被修飾語化（②複合語（前項）→③複合語（主要部））

修飾語として「B」を形容してきた「A」も、定着が進むにつれ、「A」自身が細分化することになる。そのため、「AB」ではなく「BA」という形の、「A」が主要部となる複合語が現れるようになる<sup>8</sup>。

たとえば、「ガーリー」の種類が増え、主要部となった複合語「ナチュラルガーリー」「大人ガーリー」のような「BA」が増加する。

但し、唐突に複合語「AB」として導入されたように見える例や、複合語として再生された「AB」（5節で後述する）については、①「AなB」へと再分解されることもある。

#### 4.3 体言化（③複合語（主要部）→④体言）

複合語の主要部となり、被修飾語となるまでに定着が進み、さらに定着することで、「A」は体言化し、単独で用いられるようになる。

「ラグジュアリーが味わえる」（2009年）、「フェミニニティが加速する」（2011年）、「ベーシックを見逃すな」（2009年）のような例が現れている。

#### 4.4 修飾語化（④体言→①修飾語）

一般的な表現が新奇な修飾用法を獲得することで、表現に<新しさ>を導入する段階である。

たとえば、「大人のガーリー」（2008年）のような、一般的な体言を新たな連体修飾用法として用いる例が、2010年頃から散見されるようになってきている。このほか、サ変名詞や形容動詞を連体修飾に用いる「洗練の襟」（2011年（2003年から用例はあり））や「有望の<sup>9</sup>ジャケット」（2010年）などの例が目立つ。

<sup>8</sup> 「A」が形容表現などの抽象的な語であった場合には、「BなA」の形で修飾はされにくい。「スパニッシュなガーリーカジュアル」のように、複合語の前部要素である場合には、「Bな」という形で修飾語がつく例もあるが、3語までは「官能レースミニ」のように複合語化する傾向にある。

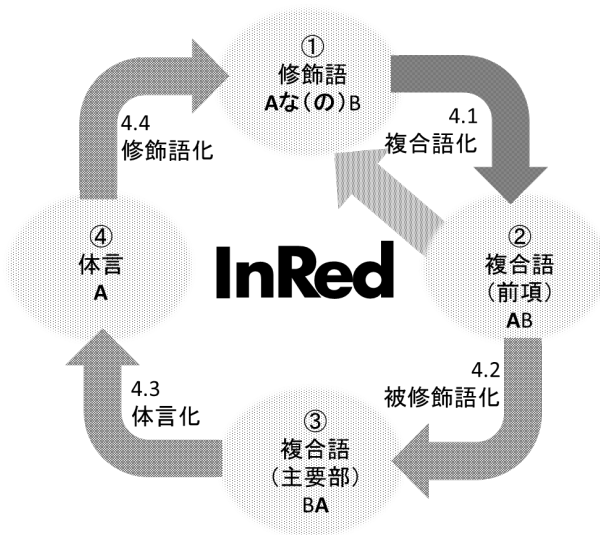
<sup>9</sup> BCCWJに「将来有望の秀才・小野」（塚谷祐一「漱石の白くない白百合」1993年出版）、「前途有望の東洋の青年」（松居竜五「達人たちの大英博物館」1996年出版）の用例が見つかったが、「有望な」のヒット件数が150件あることから、「有望の」が珍しい用例であることがわかる。Twitterデータでも「将来有望の」「前途有望の」は見つかっているが、形容動詞としての用例が一般的である。

<sup>6</sup> 当然、用例が減少し、あるいは完全に見つからなくなる場合もある。

<sup>7</sup> 「リクスなストール」「リクスな素材」の例がある。

また、「アジアな空間」(2009年)、「乙女な大人」(2009年(2005年までに用例なし))のような新たな形容詞用法も現れている。「ミニ」や「マリン」などの一般的な体言として用いられていた語が、「ミニなスティック」「マリンなリボン」「ビジーなアクセサリ」(2010年)といった<新しさ>を持つ修飾語となるのである。

以上の循環をモデル化したものを図1に示す。



【図1 InRedに見る<新しさ>のための表現循環】

ただし、以上の循環モデルはあくまで原則的なものであり、スキップされるフェイズもあり得る。これは、既に用例の定着しているフェイズが存在する場合などに見られる。

## 5. <新しさ>を指向する言語：他ドメインでの考察

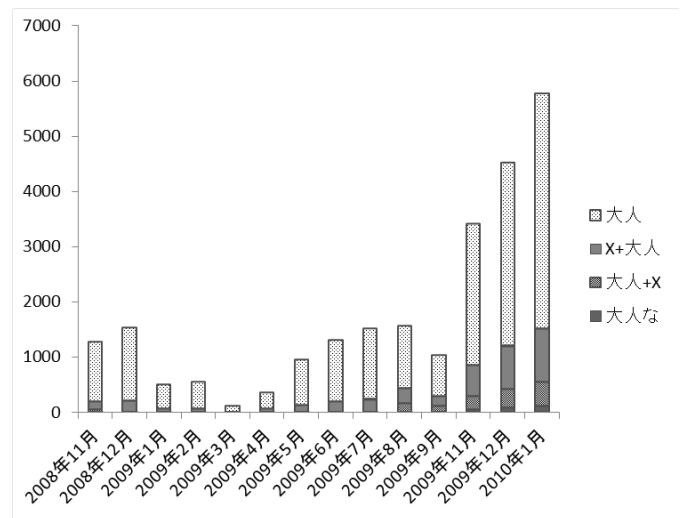
このような<新しさ>を志向する性質は、程度の違いこそあれ、他のドメインでも見られる。例えば、Twitter上でも図2のように、「大人なガーリッシュ」や「大人女子」のような「大人」の新たな用法が現れることで、「大人」用例の割合に変化が現れていることがわかる。「大人な」が使われはじめると、2009年から「大人+X」（「大人買い」「大人女子」など）が増加している。そして、「X+大人」（「ダメ大人」など）の割合も増加してくる。「大人な」の意味で用いられるようになった新たな「大人」の用例が増加しているためと考えられる。

このように、ファッション誌に限らず一般の口語文章であるTwitterの表現でも同様の循環が見られるということは、<新しさ>を指向する変化は言語一般に共通した性質である可能性があり、今後の詳細な研究が望まれる。

## 6. まとめ

女性向けファッション雑誌『InRed』において、<新しさ>のために表現が変化し、循環する現象が見られた。<新しさ>のための表現は、対象物を新しく見せるために、語の言い換えを行う例と、既存の語を組み合わせて<新しさ>のある複合語を作る例の二種類が見られる。また、同じ語を用いていても表現型を変化させるという表現の循環が行われる。『InRed』における表現の循環は、①修飾語 ②複合語（前項） ③複合語（主要部） ④体言（単独用法）の大きく4つのフェイズが見られ、用例数の少ないフェイズへの移行が観察されている。他分野や古い語、異表記などが再生されて組み込まれる例もある。このような変化は、5節で述べたように言語一般に共通した性質である可能性がある。

従来語の変化においては、新しい語や意味が導入される点が強調されていたが、本研究では、同一の語であっても、接続のされ方や表記などを変えることで、<新しさ>を担える可能性があることを示唆する。



【図2 Twitterに見る「大人」の用例】

## 参考文献

石井正彦(2007). 現代日本語の複合語形成論 ひつじ書房  
 勝田 耕起(2011). 20代女性向けファッション雑誌における言語の特徴—外来語の場合 フェリス女学院大学文学部紀要, 46, 21-31.  
 篠崎 晃一(1997). 流行語の発生と伝播 国文学 解釈と教材の研究, 42(14), 52-56.  
 現代日本語書き言葉コーパス(BCCWJ) 国立国語研究所・文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクト